

共生・公正・創造



# 東日本タイムズ号外

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合  
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号  
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290  
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【虚構からの訣別を図るべき時期に到達したJR東日本！ シリーズ5】

## 小説・労働組合で見る「松崎氏再コペ転」の理由！？

会社が仕掛けた< 松崎・本部派と福原・嶋田派との>和解工作は、大元< モデルは松崎氏>の仕組んだ田山< モデルは嶋田氏>たちへの「階級闘争」によって、破綻させられ潰れ去ったのも同然になった。会社は暫く静観することにした。警察は大元たちが田山グループを吊し上げ、ノイローゼになるほど追及行動をしているのも掴んでいた。時期を見て介入していくつもりでいる。 - 中略 -

2003年の師走も残り少なくなった。会社は警察が大元の逮捕を確実にするための準備をすすめている動きを見ながら、北本州労組を大元からの影響を弱め、中部鉄道労組や関西や南国鉄道労組のように、会社の言いなりになる労働組合にしたいと思っていた。 - 中略 - 滞在しているホテルの一室で、もの思いにふけていた大元の携帯電話が鳴った。・・・大元は会社に怒っていた。警察の包囲網も狭められている。田山一味も謝って来ない。オレが今までにない危機に立っているのに会社は何もしないでいる。会うことを拒否して、この怒りを知らしめてくれようかと思ったが、おそらく「撤回案」のことだ。会社が考えている二回目の和解策について本部から話は聞いていた。その際、会社を利用していった方が得策だと思い直した。

一日おいた夜である。都内の割烹の奥まった一室で、大元は会社の社長と会っていた。「連続して起きた事故などで、政権党や政府が国会に呼び出しをかけてきている。おそらく事故にかこつけて、労使関係にふみ込んでくる。ここは会社と組合両方のために、外部には労使一体で対応すると見せておくのが重要だ。」社長がつづけた。「先ず労組内の対立を解消し、外に一体で当たれるようにした方がいい。その上で労使一体の姿を具体的に示していきたい。それに、乗客から注文がつけられるようなことはしないで欲しいんだ。いや常識の範囲だ。ほら、改革時の職場規律の是正、あれだよ。運転中の携帯電話とか、停車中に雑誌を読んでいるとか、服装の乱れなどで、昨今、特に投書や抗議電話が多くなっている。マスコミも聞きつけているようだ」

「社長の主張はわかった。当然の事だがオレの方は労働組合だ。しかも、その辺の労働組合とは力量が違う。対応如何では会社をふくめた大問題になることもありうる。だけどオレは知っての通り今は動けない状況だ。警察はオレを事もあろうに、組織の財産を食い物にしていると疑っているようだ。オレにもしものことがあれば、労組内は大変になるのは必至だ。そうなれば会社にも大きな影響がでる」

<いつもの恫喝と哀願併用の手できたな>と社長は思ったが、おくびにも出さなかった。「そのことだが、警察の調査はかなり進んでいると聞いている。大元に、いざというような事にならないようにと思っているのは会社も同じだ。組合の今後の動きにもよるが、努力はしてみたいと思っている。組合は企業内労働組合に徹するのがいい」警察対策に努力すると言った社長の言葉に、大元の太い眉が、一瞬、ぴくりと動いた。「社長の気持ちはわかった。とにかく労使一体で、この難局は乗り切っていかなければならない。近いうちに組合は定期中央委員会がある。善は急げという言葉もある」社長は<これで大元の影響力はさらに弱くなるな>と思った。「それがいい。会社と労組のために」二人は顔を見合わせ、ニンマリして互いの杯に酒を注ぎ合った。ホテルに帰った大元は、・・・社長の言葉を思い浮かべながら、北本州鉄道労組の機関誌< モデルはJR東労組機関誌『セミナー』第81号と思われる>に掲載する原稿を一気に書き上げた。

《国鉄改革の完成に向けて（宗形明著）189ページ～192ページより抜粋》